

1104/05 年制作の二つのビザンティン貴族詩篇写本について

太 田 英伶奈

Two Byzantine Aristocratic Psalters from the Year 1104/05
(Houghton Library, MS. Gr. 3 and Bodleian Library, MS. Barocci 15)

Elena OTA

Abstract

Following my paper in the previous volume of this journal ('A Byzantine Aristocratic Psalter (Bodleian Library, MS. Barocci 15)', *RILAS* 5 (2017), 59–68), this paper compares two byzantine 'aristocratic' psalters, Houghton Library, MS. Gr. 3 and Bodleian Library, MS. Barocci 15, both made in the year 1104/05. The author studied the manuscripts and was able to introduce some fresh codicological information for both. After considering the skill of the scribes, the technique of the painters, the difference in ornamental motifs, and the relation between the sizes of parchments, it was concluded that these manuscripts are works of different workshops or circles of workmen. The two manuscripts approximate in their iconographical features but vary greatly in textual contents. This difference sheds some light on how the patrons of the manuscripts led their religious lives. Prayers and synaxarion contained in the manuscript of Houghton Gr. 3 indicate that the patron seems to have been attached to a Constantinople-based religious circle dedicated to the Theotokos. The manuscript itself apparently served for personal devotion, with its text written in a style that fits the service of the 24-hour *Cursus*. On the other hand, the patron of Barocci 15 also used his small manuscript for personal devotion, but probably not in as formal and deliberate a manner as the patron of Houghton Gr. 3 did. Because five out of eleven commentaries collected before the psalms are written by Theodoret of Cyrus, we can conclude that the patron aimed to comprehend the psalms using Theodoret's theology. Also, the style of the text not containing kontakions and other hymns explains to us that 'older' type of psalters with commentaries were still in use at the corner of the 12th century. Finally, the study of Houghton Gr. 3 and Barocci 15 manuscripts proves that Byzantines had their own purpose and preference for their psalter, and that the workmen tried to meet the demands of patrons.

はじめに

ハーヴァード大学ホートン図書館ギリシア語3番（Houghton Gr. 3 以下ホートン3番）と、オックスフォード大学ボドリアン図書館バロッチ15番（Barocci 15 以下バロッチ15番）はどちらも貴族詩篇と呼ばれるビザンティンの挿絵入り詩篇写本であり、1104/05年に制作されたことがパスカル・テーブルにより判明している。筆者は2016年2月と2017年10月にそれぞれの写本を実見調査し、バロッチ15番については本誌第5号に調査報告⁽¹⁾（以下「前稿」）を掲載した。本稿はホートン3番と、バロッチ15番との比較検討を行うものである。筆者は当初両写本が同一工房で制作された可能性を検討したが、写字生の技能、画家の手、装飾文様の違

(1) 太田英伶奈（2017）、「ビザンティン貴族詩篇写本（ボドリアン図書館バロッチ15番）について」『WASEDA RILAS JOURNAL』第5号、59–68頁。

い、写本のサイズの相関⁽²⁾などから、両写本は異なる工房ないし職人のグループによって制作された可能性が高いと判断した。しかし結果的に、両写本を注文したパトロンの宗教生活の違いをある程度推測することができたので、本稿にて報告する。なお、本稿における詩篇の番号と内容は七十人訳聖書に基づく⁽³⁾。

ホートン 3 番の概要



図1 パスカル・テーブル

当写本は 290 フォリオ⁽⁴⁾からなる。縦 22.5cm、横 17.8cm と、バロッチ 15 番より一回り以上大きい。本文はミナスキュール体で、1 コラムに 21~22 行書かれる。すべて同一の写字生の手になり、欄外に書き落しの部分を追加した箇所がほとんどないため、豊富な知識と経験を持つ写字生が筆写に当たったものと思われる。カヴルス=ホフマンは以前に当写本を調査した際、クワイアの開始フォリオに記されるクワイア・ナンバーが 19 世紀の再製本の際に切り落とされたと記録している⁽⁵⁾。バロッチ 15 番にはフォリオの端でギリシア数字のクワイア・ナンバーが不自然に切れている箇所が複数あった⁽⁶⁾が、当写本にはそのような箇所が見受けられないため、よほど大幅な裁断が行われたのでない限り、当初からクワイア・ナンバーは記されていない可能性が高い。コロフォンはないものの、fol. 282v 以降に開始年 1104/05 年、終了年 1123/24 年のパスカル・テーブル（図 1）がある。パスカル・テーブルの開始年もしくは直後の年が写本の制作年とされるため、当写本もバロッチ 15 番と同様、1104/05 年に制作されたものと云える。テキストの字体や挿絵の様式もこの年代と矛盾するものではない。巻末の 6 フォリアに徴が生えている以外は写本の保存状態は極めて良好で、虫喰いもない。

クワイアは基本的に 8 葉のフォリオを構成単位とするクワテルニオンで、合計 37 クワイアを数える。なお、筆者は今回の調査でカヴルス=ホフマンが以前に観察したクワイア構成に誤りがあることを 3 か所⁽⁷⁾発見した。正しいクワイア構成は図 2 を参照されたい。写本の内容は以下の通りである（ゴシック体は挿絵）。

fol. A^r：ミカイル・カンタクズィノスとその孫に関する書き込み⁽⁸⁾

(2) ロバート・ネルソンとジェリー・ボナは大きさの異なる 2 つの写本があり、大きな写本のフォリオの短辺が小さな写本のフォリオの長辺と一致する場合、その 2 つの写本は同一の羊皮紙から裁断された可能性が高いとの仮説を立て、実際にこうした相関関係にある写本を列举した上で仔細に検討している。Nelson, R., Bona, J. (1991), 'Relative Size and Comparative Value in Byzantine Illuminated Manuscripts: Some Quantitative Perspectives', *Paleografia e codicologia greca, Atti del II Colloquio Internazionale (Berlino-Worfenbüttel, 17-21 ottobre 1983)*, v.1, Allesandria, 339-53. ホートン 3 番とバロッチ 15 番はフォリオが後の再製本の際に裁断されている上、裁断前のサイズを考慮してもこのような相関関係にはない。

(3) テキストは Brenton, L. (1995), *The Septuagint with Apocrypha: Greek and English*, Peabody, Massachusetts (first published in 1870) による。

(4) 各フォリオの右上に鉛筆で書き込まれたナンバリングに従えば 289 フォリオであるが、187 番目と 188 番目の間にあるフォリオに番号が振られていないため 290 フォリオとなる。

(5) Kavrus-Hoffmann, N. (2010), 'Catalogue of Greek Medieval and Renaissance Manuscripts in the Collections of the United States of America Part V. 1: Harvard University, The Houghton Library', *Manuscripta* 54 (1), 96.

(6) 太田 (2017)、59 頁。

(7) カヴルス=ホフマンは第 24 クワイアを 2 葉欠落したクワテルニオンと記述しているが、実際には 1 葉のみを欠いている。同様に、第 28 クワイアは 4 葉ではなく 5 葉が欠落しており、第 37 クワイアは 1 葉ではなく 2 葉が追加されている。カヴルス=ホフマンの観察結果は Kavrus-Hoffmann (2010), 96 を参照。

(8) Papazoglou, G. (1988), 'Le Michel Cantacuzène du codex Mavrocordatianus et le possesseur homonyme du Psautier de Harvard', *REB* 46, 164. 以下文献略号は次の通りである。Analecta sacra = J. B. Pitra, *Analecta sacra Spicilegio solesmensi parata*, Farnborough 1966 (first published in 1876-84), CPG = Geerard; F. Glorie (eds.), *Clavis patrum graecorum*, Turnhout 1974-87, DOP = *Dumbarton Oaks Papers*, PG = J. P. Migne (ed.), *Patrologiae cursus completus, Series graeca*, Paris 1857-66, REB = *Revue des études byzantines*.

- fol. B : ミカイル・カンタクズィノスに関する抄録⁽⁹⁾
 fols. 1r-7v : ミカイル・プセロス、『詩篇についてのエピグラム⁽¹⁰⁾』
 fol. 7v : ヨアンニス・クリソストモス、『「エフェソの信徒への手紙」について⁽¹¹⁾』
 fol. 8v : ダヴィデを伴うデイシス (全頁大、図 3)
 fols. 9r-111r : 詩篇 1-76
 fols. 111r-112r : 僧グリゴリオスの祈り⁽¹²⁾
 fol. 112rv : 日中に我々が犯した罪のためのアコルティア⁽¹³⁾
 fol. 113r : 律法を授与するモーセ、アサフの胸像 (図 5)
 fols. 113r-215v : 詩篇 77-151
 fol. 215v : ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ (全頁大、図 6)
 fol. 216v : 紅海渡渉・溺れるエジプト軍 (全頁大、図 7)
 fol. 217r : モーセの胸像 (図 8)
 fols. 217r-232v : 頌歌
 fol. 232v : 僧グリゴリオスの祈り⁽¹⁴⁾
 fols. 233r-261v : オロロギオン⁽¹⁵⁾
 fols. 262r-279v : シナクサリオン⁽¹⁶⁾
 fols. 279v-281v : 大斎 (四旬節) のためのトロパリヤ⁽¹⁷⁾
 fols. 282r-288v : パスカル・テーブル、太陽と月のサイクルおよび復活祭の計算に関する解説⁽¹⁸⁾
 fols. 288v-289v : ダマスコスのヨアンニス、『信仰について⁽¹⁹⁾』

当写本の冒頭には後代に追加された紙のフォリオが 5 葉あり、このうちフォリオ A' とフォリオ B には 16 世紀から 19 世紀初頭にかけての所有者に関わる書き込みがある。まずフォリオ A' には、ギリシア語で「この詩篇はアンドロニコスの父ミカイル・カンタクズィノスが学びのために、〔神〕キリストの降臨〔＝天地創造〕から 7097 年後の 1589 年 7 月 17 日水曜日、聖エカテリニの日手に取った⁽²⁰⁾」という文章が書かれている。7 月 17 日は聖エカテリニではなく聖マリナの祭日なので、何故このように書かれているのかは解せない。フォリオ B には 1578 年に処刑されたイスタンブールのアルコン、ミカイル・カンタクズィノスの生涯に関する抄録が見られる。フォリオ B にある通りミカイル・カンタクズィノスが 1578 年に処刑されたのであれば 1589 年には既にこの世になかったため、かつて多くの研究者がフォリオ A' とフォリオ B に登場するミカイル・カンタクズィノスはそれぞれ同姓同名の別人であると考えてきた。しかし、1988 年にギオルギオス・パパバズグルがフォリオ A' の書き込みを詳細に分析した結果、上記の通り「アンドロニコスの父ミカイル・カンタクズィノス」という文言を発見した。1578 年に刑死したミカイル・カンタクズィノスには確かにアンドロニコスと

(9) Papazoglou, G. (1991), 'Un manuscrit inconnu provenant de la bibliothèque de l'archonte phanariote Nikolaos Karatzas', *REB* 49, 256.

(10) Westerink, L. (1992), *Michaelis Pselli Poemata*, Leipzig, 1-13. ただしヴェスターリンクが出版した校訂版とは異なる箇所も多い。元はプセロスがコンスタンティノス 9 世モノマコス帝 (在位 1042-55 年) に宛てて著した詩文である。

(11) *PG* 62: 112, ll. 33-38.

(12) Anderson, J., Parenti, S. (2016), *A Byzantine Monastic Office, 1105 A.D.: Houghton Library, MS gr. 3*, Washington, D.C., 48-52; 283., Vassis, I. (2005), *Initia carminum byzantinorum*, Berlin, 910. アトス山ディオニシウ修道院 86 番 (1037 年ごろ、コンスタンティノポリス) にも同様の祈禱文がある。ただし、後の手による。

(13) *Ibid.*, 53.

(14) *Ibid.*, 77. なお fols. 111r-112r に記されている「僧グリゴリオスの祈り」とは内容が異なる。

(15) *Ibid.*, 79-180.

(16) *Ibid.*, 181-253.

(17) *Ibid.*, 96.

(18) *Ibid.*

(19) Kotter, B. (ed.) (1973), *Die Schriften des Johannes von Damaskos*, v. 2, Berlin, 61, ll. 171-84.

いう名の息子があったため、16世紀末のイスタンブールにアンドロニコスという息子を持つミカイル・カンタクヰノスなる蔵書家が二人も存在したとは考えにくいことから、パパゾグルはフォリオ A' の書き込みはアンドロニコスが父に成り代わって書いたものであり、フォリオ A' とフォリオ B で言及されるミカイルはやはり同一人物であったと結論づけた⁽²¹⁾。

パパゾグルはフォリオ B の長大な書き込みも分析し、その筆跡が18世紀末～19世紀初頭にイスタンブールのフェネル地区を統治したアルコン、ニコラオス・カラヰアスのものであると突き止めた⁽²²⁾。つまり、当写本は16世紀末から19世紀初頭までイスタンブールのギリシア人指導者層の手にあったということになる。後にハーヴァード大学の学長となったエドワード・エヴェレットは当写本を1819年に「没落したギリシア人公爵から」購入したと述懐している⁽²³⁾が、このギリシア人公爵がカラヰアスの子孫である可能性も捨て切れない。本文の筆跡の流麗さや挿絵の水準、羊皮紙の質、さらに巻末のシナクサリオンに5月11日のコンスタンティノポリス建都祭が記載されている⁽²⁴⁾ことからして、当写本は首都で制作されたと見て差し支えないと筆者は考えるが、19世紀以前の来歴が全く知られていない貴族詩篇が多い中、16世紀末という比較的早い時期からイスタンブールにあったということも、首都制作説を後押しする点であろう。

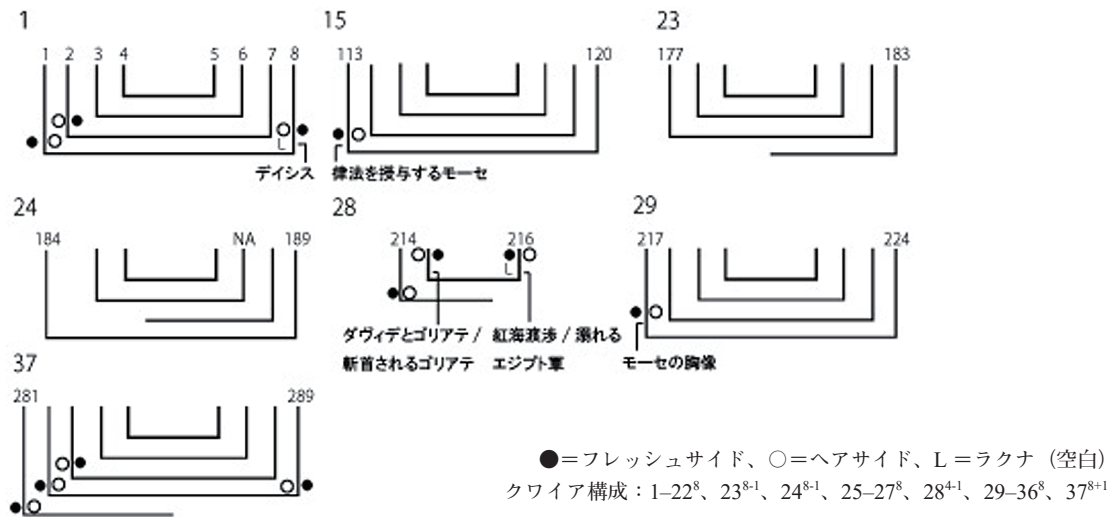


図2 Houghton Gr. 3 のクワイア模式図

⁽²⁰⁾ 甲括弧内は筆者による補足。‘τὼ ψαλτήριον ὑπάρχει μηχαὶλ Καντακουζηνοῦ του κυρήτζη ἀνδρονίκου κ(αὶ) ἐπίασε νά το μανθάνει, ἐν μηνί ἰουλίου ιζ' ἡμέρ(α) δη τῆς ἀγίας αἰκατερήνας, ἔτους ςζζ' ἀπο χ(ριστο)ῦ καταβάσεως ἔτους ,αφπθ'’. Papazoglou (1988), 164. なお、書き込みの最初の解読者であるパパゾグルは奇妙にも「1589 (αφπθ') 年」と末尾で西暦年が記載されているにも拘わらず、「キリストの降臨から 797 年」と読み下しており、以降多くの研究者もパパゾグルの読みに従ってきた。しかし、パパゾグルの解釈通りに捉えれば、キリスト降誕は紀元 792 年の出来ごとになってしまう。そこで元のギリシア語の書き込みを参照すると、797 年に当たる箇所をアンドロニコスは ςζζ' と書いている。ギリシア数字では 797 は ψζζ' (ψ = 700, ζ = 90, ζ = 7) と記されなければならない、ςζζ' は 7097 を表していると考えるのが普通である。7097 年をビザンティンで広く使用された紀年法である世界創造紀元による年記と仮定し、これを西暦に変換すると 1589 年となり、辻褄が合う。ただし、7097 年説を採るとしてもなお説明のつかない点が残る。世界創造紀元は神による天地開闢の年を始原としており、キリスト降誕はそれから 5502 年後 (紀元 6 年) のことである。字義通り「キリストの降臨から 7097 年」とすると、アンドロニコスが書き込みを記した年は紀元 7103 年という途方もない結論に行き着いてしまう。そこで、アンドロニコスは天地創造の際にすでに神と同一なるキリストがこの世に臨在していたと考え、「降臨」という言葉で「キリスト降誕」ではなく「天地創造」を指していた、と筆者は解釈した。世界創造紀元の始原を「キリストの降臨」と表現する点については、今後も類似例がないか留意して調査を行っていきたい。

⁽²¹⁾ Ibid., 164–65.

⁽²²⁾ Papazoglou (1991), 255–61.

⁽²³⁾ Everett, E. (1820), ‘An Account of Some Greek Manuscripts Procured at Constantinople in 1819 and now Belonging to the Library of the University at Cambridge’, *Memoirs of the American Academy of Arts and Sciences* 4 (2), 409–15.

⁽²⁴⁾ Anderson, Parenti (2016), 226–27.

当写本の先行研究についてはカトラー⁽²⁵⁾、スパタラキス⁽²⁶⁾らのカタログに挿絵のディスクリプションがあるほか、ニースが 1975 年に発表した論文⁽²⁷⁾で詳細な図像の分析を行った。2016 年には当写本に収録された詩篇と頌歌以外の本文のほぼ全文が出版され⁽²⁸⁾、典礼史の研究上貴重な写本であることが窺える。

ホートン 3 番の挿絵と、バロッチ 15 番との比較

以下、当写本の挿絵について詳述する。なお、本稿では人物像を含まない単純な植物文のヘッドピースなどは考察から除く。



図3 「ダヴィデを伴うデイス」

(25) Cutler, A. (1984), *The Aristocratic Psalters in Byzantium*, Paris, 35–36.

(26) Spatharakis, I. (1981), *Corpus of Dated Illuminated Greek Manuscripts: to The Year 1453*, v. 1, Leiden, 38.

(27) Nees, L. (1975), 'An Illuminated Byzantine Psalter at Harvard University', *DOP* 29, 207–24.

(28) Anderson, Parenti (2016).

「ダヴィデを伴うデイス」(fol. 8v、図3)

門型の構造物を背景としてデイス図像が中心に置かれている。緑色の平面の上に、聖母マリア、キリスト、洗礼者ヨハネが並び、マリアとヨハネはそれぞれキリストに人類の執り成しを嘆願している。詩篇写本の挿絵としてデイスが採用されるのは珍しく、他にはベルリン大学神学部にあった3807番写本⁽²⁹⁾と、ヴェネツィア、マルチアーナ図書館ギリシア語Z. 535番⁽³⁰⁾が現存するのみである。貴族詩篇ではないものの、ヴァティカン聖使徒図書館ギリシア語752番の第1詩篇の門型ヘッドピースには小さくデイスが表わされている⁽³¹⁾。巻頭挿絵にデイス図像が現れる作例はむしろ福音書写本やレクショナリー写本に多く、異なるジャンルの写本間における挿絵の移入を考える必要がある。ニースはデイスが特定の文脈に依拠しないアイコン的な図像であることと、典礼における記念もしくは執り成しの祈りを表現した図像であることを理由に、福音書やレクショナリーの挿絵とは関係なく、デイス図像が典礼の影響を受けて詩篇写本にも入り込んだと述べている⁽³²⁾。筆者は当写本が巻末にシナクサリオンを伴うというレクショナリーに近い構成であることから、やはり福音書やレクショナリーからの影響も考慮すべきであると考ええる。

パントクラトル型のキリストの足下には、跪いてキリストの右足に触ろうとしている人物(図4)が見える。図像表現上ではしばしば寄進者がこのプロスキニシス像で描かれるが、当写本のプロスキニシスの人物像は衣服の大部分が剥落してしまっており、どのような階層に属する人物であったのか、手掛かりが得られない。

聖母マリアの左には、門型構造物の背景と円柱の狭い空間に押し込められるようにして、左手に何も書かれていない巻物を持ったダヴィデが描かれている。卷子本はビザンティン美術において預言者のアトリビュートであり、ダヴィデは伝統的に預言者として扱われてきた。通常、預言者は卷子本を持っていない方の手で彼が預言したものを指さすことが多いが、ここでダヴィデは何を、というより誰を指さしているのだろうか。デイス図像にダヴィデが描き込まれること自体は非常に稀であるが、ダヴィデは詩篇の大部分の著者と目されているので、詩篇の巻頭挿絵にダヴィデの肖像が配されるのは珍しくない。実際、この挿絵に向かい合うフォリオから詩篇本文のテキストが始まる。しかし、デイス図像とダヴィデの肖像を別のフォリオに描いても良かったところを、当写本の画家はわざわざダヴィデを窮屈な空間に押し込めてデイス場面の中に立たせているのである。しかも、著者肖像としてのダヴィデは冊子本を持つのが慣例であるが、ここでのダヴィデは卷子本を手にしており、預言者としての側面が強調されていることが窺える。同じく貴族詩篇の一つであるアトス山ヴァトペディ修道院760番fol. 19vには、「エルサレム入城」の挿絵に第8詩篇が記された卷子本を持つダヴィデの姿が描き込まれており⁽³³⁾、このような作例があることから、ホートン3番の画家は冊子本と卷子本がそれぞれダヴィデの異なる属性を表すという規範を知らなかったとは考え難い。ニースはデイス図像にダヴィデが加えられた理由を、デイスに関連する詩篇の有無、つまり典礼と詩篇の関連に求めることはできないとしており、もしそうであればダヴィデはマリアではなくヨハネの側に立っているはずだと指摘するが、その根拠は不明である⁽³⁴⁾。筆者もダヴィデがマリアの側に立っていることが、この問題の鍵であると考ええる。パロッチ15番の巻頭挿絵でダヴィデが聖母子アイコンを礼拝し、かつ詩篇の著者として自らの著作をマリアに献呈していると考えられる⁽³⁵⁾ことから、ホートン3番のダヴィデが

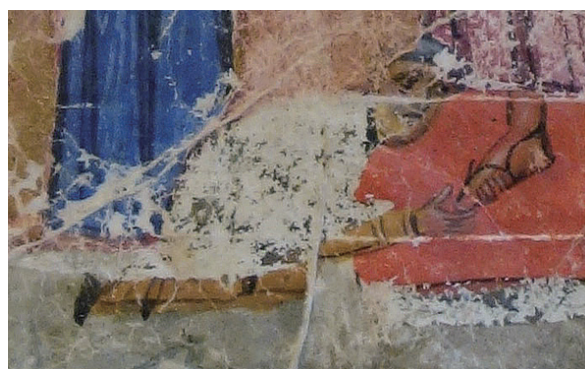


図4 寄進者像

(29) Stuhlfauth, G. (1933), 'A Greek Psalter with Byzantine Miniatures', *The Art Bulletin* 15 (4), 310–326.

(30) Parpulov, G. (2014), *Toward a History of Byzantine Psalters ca. 850–1350 AD*, Plovdiv, 98; 173, fig. 9; 36.

(31) fol. 19r. 'Digi Vat Lib', https://digi.vatlib.it/view/MSS_Vat.gr.752.pt.1 (2018年4月20日最終閲覧)

(32) Nees, (1975), 211–12.

(33) Cutler (1984), 107; fig. 372.

(34) Nees, (1975), 213.

指さしているのはマリアではないかと思われる。ダヴィデがマリアの側に配されるのは、何かしら神学的な理由が働いているからであろう。13 世紀になると、アカティストス讃歌を含めたビザンティン詩篇写本が制作された⁽³⁶⁾。ビザンティンの聖堂装飾において、ダヴィデは詩篇第 44 篇 10 節の「娘よ、聞け。耳を傾けて[……]」⁽³⁷⁾ という文言が記された卷子本を手にした姿で受胎告知と隣接する画面に描かれることがしばしばある。したがって、ダヴィデがマリアの予型を語ったという点で両者には神学的に深く繋がるのであるが、詩篇の他の文言に同じくマリアを予告したものがどの程度あるか、今後の研究を通じて明らかにしなければならない。

画面をルーリングの罫線が横切っており、挿絵としての見栄えをやや損なっている。fol. 8r は空白のまま残されているので、直前のテキストと挿絵が直接触れないように配慮されていることが判るが、あらかじめ挿絵のためにルーリングを切らないフォリオを用意できるほど周到な準備が成されていたのではなかったようである。

これを含め、ホートン 3 番のすべての挿絵に銘文が見られない。フォリオの右下にかき消された文字列が見えるが、恐らく後代に書き加えられたもので、銘文ではないであろう。

「律法を授与するモーセ、アサフの胸像」(fol. 113r、図 5)

詩篇 77 篇を飾る帯状ヘッドピースにはイスラエルの民に律法を授与するモーセ、第 77 篇冒頭の単語 ΠΡΟΣΕΧΕΤΕ の頭文字パイにはアサフの胸像が描かれている。12 世紀ビザンティンの典礼においては詩篇を 20 個のカティスマという節に分けて詠唱する習慣が定着しており、そのちょうど中間、つまり第 11 カティスマの開始節が第 77 篇にあたる。パロッチ 15 番の同じ箇所には挿絵が付されていない。

当写本では全頁大挿絵ではなく帯状ヘッドピース中の小さな画面に縮約されているが、若者姿のモーセが何かを左手の二人の男に渡している。手渡されている物体は絵の具がぼやけていて判然としないが、場面の内容からして十戒が刻まれた小さな石板であろう。彼らの頭上に見えるのは、絵の具が一部剥落した神の手である。



図 5 「律法を授与するモーセ、アサフの胸像」

(35) 太田 (2017)、62 頁。

(36) Parpulov (2014), 59.

(37) マケドニア、クルヴィノヴォのアギオス・ゲオルギオス聖堂など。益田朋幸 (2011 年)、『ビザンティンの聖堂美術』、東京、104 頁。詩篇 44 : 10 は正確にはダヴィデではなくコラの子の詩であるが、ビザンティン美術の伝統上、ダヴィデがこの文言を記された卷子本を持った姿で描かれる。

第 77 篇は「アサフによる歌」というタイトルが付いており、ダヴィデ王およびソロモン王時代にエルサレム神殿の楽師を務めた預言者アサフが神を称え、イスラエルの民の不品行を正す内容となっているため、アサフが挿絵として選ばれている。しかし、貴族詩篇にアサフの肖像が描かれる例は当写本を除いて他にない。詩篇におけるアサフの肖像は古くは 9 世紀の余白詩篇、アトス山パントクラートル修道院 61 番に見えるため、デル・ネルセシアンが言うように、貴族詩篇に対する余白詩篇挿絵からの影響を考慮する必要があるだろう⁽³⁸⁾。ニースはこのようにイニシャル装飾としてアサフが描かれているのは当写本のみであり、同様のイニシャル装飾がパリ国立図書館ギリシア語 1262 番に頻繁に表れるため、両写本は同じ工房で作られたと主張している⁽³⁹⁾。

「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」(fol. 215v、図 6)

本挿絵と、「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」の挿絵は、ホートン 3 番とバロッチ 15 番の両方で、テキストを挟まずに同一フォリオのレクトとヴェルソに配置されている。「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」は詩篇 151 篇、つまり詩篇本文の最後を飾る挿絵である。詩篇 151 篇の内容については前稿に書いた通り⁽⁴⁰⁾である。

2 写本とも枠を上下二段に分け、上段にダヴィデとゴリアテの闘い、下段に斬首されるゴリアテを表す。ホートン 3 番の挿絵は絵の具の剥落が酷く、下段のゴリアテの頭部などはほとんど見えないが、枠の形状やダヴィデとゴリアテのポーズなど様々な点でバロッチ 15 番の挿絵に近似した例と云える。ただし、ホートン 3 番のダヴィデは後方ではなく前方に向かって体を乗り出しており、左手は布切れで覆われている。この布切れはバロッチ 15 番をはじめとした多くの作例に描かれるマフォリオンの名残ではないかとニースは観察しており⁽⁴¹⁾、筆者も同意する。また、背景の山岳の形状や色合いは当写本ではかなり簡略化され、金泥も用いられていない。

「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」(fol. 216v、図 7)

fol. 217r から始まるモーセの第一頌歌に付された挿絵である。バロッチ 15 番では一つ前の挿絵と同じく、画面を上下二段に分け、上段を「紅海渡渉」の一場面、下段を「溺れるエジプト軍」に宛てていたが、ホートン 3 番の挿絵は、バロッチ 15 番とは枠の形状が大きく異なっている。円を 3 つ重ねたような枠の中に、上段に紅海を渡るモーセとイスラエル人、下段に紅海に呑み込まれるエジプト人たちが描かれる。全体的に絵の具がかなり剥落しており、モーセや他の人物の顔は見えない。こうした円形を連ねた枠は他の貴族詩篇ではわずかに 1 例、マルチャーナ図書館ギリシア語 II. 113 番 fol. 191v の「律法を受け取るモーセ」⁽⁴²⁾において用いられているのみである。

枠の部分を注視すると、上下に配された二つの円の赤い弧が画面を完全に横切っているだけでなく、二つの円が接する点にさらに小さな赤い円が二つ描かれているのがうっすらと見える。ニースの指摘する通り、本来計画されていた枠はこの上下の赤い円と小さな赤い円 2 つもしくは 6 つ⁽⁴³⁾であり、何らかの理由でさらに大きな円の弧を描き足して中途半端な四葉形の画面としたようである。しかし、今見えている画面の下にさらに古い挿絵が確認できないので、枠の形状の変更は工房で挿絵が描かれる直前に行われたと考えられる。当初の枠のまま画面が完成していたとすれば、恐らくバロッチ 15 番の挿絵のように、「紅海渡渉」と「溺れるエジプト軍」の場面は完全に分けて描かれていたのであろう⁽⁴⁴⁾。

言うまでもなく、この奇妙な四葉形の枠はホートン 3 番の他の挿絵の枠とはまったく釣り合いがとれていない。何故この挿絵のみ異なる形状の枠が与えられたのか現時点では明確な解答は得られないが、バロッチ 15

⁽³⁸⁾ Der Nersessian, S. (1965), 'A Psalter and a New Testament Manuscript at Dumbarton Oaks', *DOP* 19, 175–77.

⁽³⁹⁾ Nees, (1975), 218.

⁽⁴⁰⁾ 太田 (2017)、62 頁。

⁽⁴¹⁾ Nees, (1975), 219.

⁽⁴²⁾ Cutler (1984), 88; fig. 310.

⁽⁴³⁾ Nees, (1975), 220.

⁽⁴⁴⁾ 太田 (2017)、64 頁。

番の挿絵も恐らく後の手によって、他の挿絵にはない銀色の植物文状の枠で囲まれている⁽⁴⁵⁾。枠の形状の違いから特定の挿絵を強調する意図を読み取るべきなのか、もしそうであれば何故「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」の挿絵のみが強調されるのか、他の貴族詩篇や詩篇の詠唱における頌歌の機能と併せて考える必要がある。

当写本の挿絵はすべて羊皮紙のフレッシュサイドに描かれているが、この挿絵のみヘアサイドに描かれている。これは前の挿絵の「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」と挿絵同士が直接触れないようにフォリオを一つ飛ばした結果と思われる。「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」と「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」の挿絵があるクワイアはクワテルニオンではなくビニオンであり、しかも4番目のフォリオが欠けているという特異な構成である。しかし、テキストの欠落はなく、「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」と「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」の間に他の挿絵が入る作例もヴァトペディ修道院760番を除いて他にないので、恐らく当初のクワイア構成を保っていると考えられる。

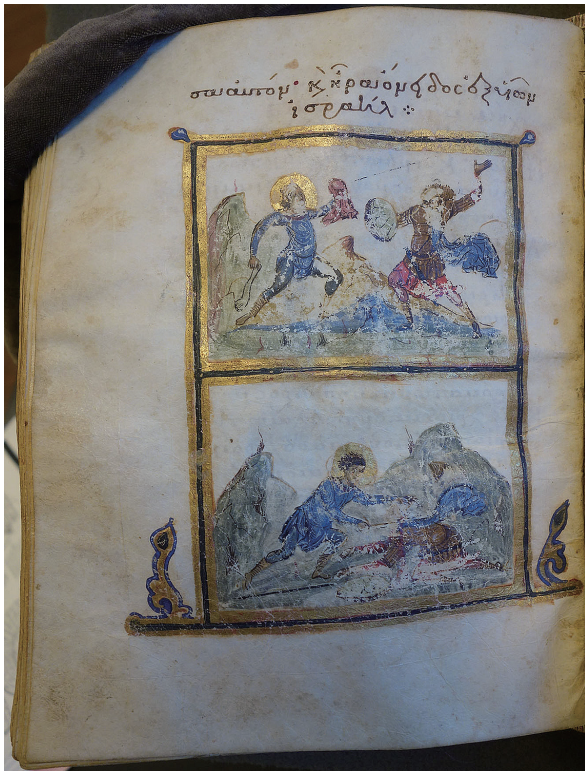


図6 「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」



図7 「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」

「モーセの胸像」(fol. 217r、図8)

ホートン3番の「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」と向かい合うフォリオの上部には、このフォリオから始まる第一頌歌の作者であるモーセの胸像が帯状ヘッドピースに描かれている。パロッチ15番には同様の挿絵はない。図像学的に特筆すべき点はないものの、「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」のモーセとは若干フィジオノミーが異なっているように見える。「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」のモーセの顔貌は不明であるが、この帯状ヘッドピースのモーセと違って髪がゆるやかに波打っている。もちろん、これは単に絵の具の剥落のためにそのように見えているだけかもしれない。fol. 113rの帯状ヘッドピースのモーセはやはりfol. 217rのモーセと同じく、マッシュルーム状の髪型をしているので、少なくとも二つの帯状ヘッドピースは同じ画家によって描かれたものであろう。しかし、これらの帯状ヘッドピースに比べると「紅海渡渉・溺れるエジプト軍」とその直前の「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」は全体的に仕上げが雑である。

ホートン3番とパロッチ15番は全頁大挿絵の数とその挿入箇所が同じであるが、この2写本と同じ装飾プ

(45) 同上。



図8 「モーセの胸像」

ログラムを採用する貴族詩篇は見当たらなかった。両写本は装飾プログラムのみならず、ダヴィデと聖母の結びつきを強調する巻頭挿絵や、「ダヴィデとゴリアテの闘い・斬首されるゴリアテ」の挿絵の様式も似ている。

ホートン 3 番のテキストと、バロッチ 15 番との比較

以上、挿絵の上では両写本には共通点が多いことが判明したが、テキストからはどのような所見が得られるだろうか。貴族詩篇の本文には必ず詩篇と、多くの場合旧約・新約聖書から神への讃歌を抜粋した頌歌が含まれる。しかしその他のテキストについては各写本の差異が非常に大きく、一つとして同じ構成の本文を持つ貴族詩篇はない。ホートン 3 番の fol. 282r 以降の「太陽と月のサイクルおよび復活祭の計算に関する解説」の一部はバロッチ 15 番にも見られる⁽⁴⁶⁾が、これを除くと、両写本のテキストはむしろ相違点が目立つ。

最大の違いは、詩篇本文の筆写のスタイルである。バロッチ 15 番の詩篇本文は間に他のテキストを挟むことなく筆写されている。ところが、ホートン 3 番では各カティスマの直後にトロバリオン 2 篇とテオトキオン⁽⁴⁷⁾、そして各聖人による、もしくは各聖人のための祈禱文が一つのセットとして書かれており、これが 20 回繰り返される。現在正教会で採用されている時課は、晩課から九時課までの合計 8 課であるが、かつてはエジプト起源のクルスス (*Cursus*) と呼ばれる 1 日を 24 の時課に分ける典礼が一部の修道院で実践されていた⁽⁴⁸⁾。当写本の各カティスマの間に挟まれた祈禱文はその形式からしてクルススの典礼に対応しており、一つの時課、つまり 1 時間に 1 カティスマを朗詠するように設定されている⁽⁴⁹⁾。ただし、詩篇のカティスマは合計 20 個しかないので、24 課のうち 4 つは切り捨てられている。また、第 10 カティスマと第 11 カティスマの間に「日中我々が犯した罪のためのアコルティア」というテキストがあることから、当写本の注文主は第 1 から第 10 カティスマを日没前に朗詠していたことが判る。各カティスマに必ずテオトキオンが伴うこと、そして 20 ある祈禱文の中で最も長大なのが第 18 カティスマの直後に挿入された聖母マリアへの祈禱⁽⁵⁰⁾であることからして、マリアへの崇敬が強く押し出されている印象を受ける。同様の印象は巻末のシナクサリオンからも得

(46) fol. 381r-391v. Parpulov (2014), 61–62, note 63. 太田 (2017)、60 頁。

(47) シナイ山アギア・エカテリニ修道院ギリシア語 40 番、同 868 番、アトス山イヴィロン修道院 22 番、アトス山パントクラートル修道院 43 番にはホートン 3 番と同様の方法で、同じトロバリオン 2 篇とテオトキオンが筆写されている。Parpulov (2014), 109.

(48) 現存する最古級の聖書写本であるアレクサンドリア写本 (大英図書館ロイヤル 1. D. V-VIII、5 世紀) や余白詩篇の代表格であるクルドフ詩篇 (モスクワ国立歴史博物館クルドフ 129A) に既に記載がある。Frøyshov, S. (2007), 'The Cathedral-Monastic Distinction Revisited Part I: Was Egyptian Desert Liturgy a Pure Monastic Office?', *Studia Liturgica* 37, 208–213., Parpulov (2014), 104.

(49) Anderson, Parenti (2016), 347.

(50) *Ibid.*, 66–71.

られる。ビザンティン世界において挿絵入り詩篇写本がシナクサリオンを伴う例は、管見の限りではホートン 3 番と、余白詩篇の一つに数えられる《ハミルトン詩篇》(ベルリン、Kupferstichkabinett der Staatlichen Museen Preussischer Kulturbesitz, 78. A. 9⁽⁵¹⁾)のみである。ホートン 3 番のシナクサリオンは概ねコンスタンティノポリス総主教座のシナクサリオンに従っている。とはいえ、総主教座のシナクサリオンに比べると、当写本のシナクサリオンでは聖母マリアに関連する祭日を入念に祝うという明確な相違点がある。総主教座のシナクサリオンではマリアの祭日は当日のみが祝われるが、当写本のシナクサリオンにおいてはどの祭日でもプロエオルティア(前祭)とメテオルトン(後祭)が祝われている(表 1)。特に 8 月 15 日の聖母の御眠りに対してはメテオルトンが 8 日間も続いており、マリア偏重の傾向が読み取れる。

以上の点からは、単に聖母マリア崇敬の実践を重視する人物が当写本のパトロンだったらしいということが言えるに過ぎない。しかし、聖母崇敬の強さに加えて、懺悔のトロパリオンの反復、「日中我々が犯した罪のためのアコルティア」の存在、そして fol. 111r 以下と fol. 232v に挿入された「僧グリゴリオスの祈り」が裁きの際の執り成しを願う内容であることから、当写本の巻頭挿絵にデイシスが選ばれたのは納得できる。このグリゴリオスが当写本のパトロンにとって重要な人物であったことは推測できるが、筆者はグリゴリオスが何者であるか未だ特定できていない。

表 1 総主教座と Houghton Gr. 3 のシナクサリオンにおける聖母に関連する祭日の扱い

日 付	祭 日	コンスタンティノポリス 総主教座		Houghton Gr. 3	
		P	M	P	M
9 月 8 日	聖母降誕	/	/	1	4
11 月 21 日	聖母の神殿奉献			1	2
3 月 25 日	受胎告知			1	/
8 月 15 日	聖母の御眠り			1	

P = プロエオルティア、M = メテオルトン

バロッチ 15 番はホートン 3 番に比べると、写本をどのように使用したかの示唆を与えてくれるテキストがない。しかし、目につくのは詩篇本文の前に挿入されたテキストの多さである。これらはすべて詩篇の註解であり、こうした註解を前置きとして収録する詩篇写本は、12 世紀初頭ごろまで盛んに制作された⁽⁵²⁾。しかし、ちょうどバロッチ 15 番の年代辺りから衰退し、代わりにホートン 3 番のように、祈禱文や讃歌を収録した詩篇写本が主流となっていく。従来バロッチ 15 番に付せられた 11 篇の前置きは様々な著者に帰されてきたが、筆者がテキストの詳細な同定を行った結果、以下に示す通り 11 篇中 5 篇がキロスのテオドレトスの著作であることが判明した。

fols. 1r-9v: カイサリアのバシリオス、『詩篇講話⁽⁵³⁾』

fols. 9v-11v: キロスのテオドレトス、『詩篇註解⁽⁵⁴⁾』

fols. 11v-14v: $\pi\epsilon\rho\iota\ \tau\acute{\omega}\nu\ \upsilon\pi\omicron\theta\acute{\epsilon}\sigma\epsilon\omega\nu\ \tau\acute{\omega}\nu\ \alpha\nu\alpha\beta\alpha\theta\mu\acute{\omega}\nu$.⁽⁵⁵⁾

(51) ハミルトン詩篇については Havice, C. (1984), 'The Marginal Miniatures in the Hamilton Psalter (Kupferstichkabinett 78.A.9)', *Jahrbuch der Berliner Museen* 26, 79-142 を参照。シナクサリオンは fol. 367r-370r を占める。なお、当写本のテキストにおいてはラテン語とギリシア語が混在しており、詩篇本文は両方の言語で筆写されている。

(52) Parpulov (2014), 63.

(53) CPG 2836, PG 29: 209A-213A/C.

(54) *Analecta sacra* 2: 429ff. 当テキストは *Analecta sacra* ではオリゲネス、その他の文献ではヒッポリトスなどに帰されるが、ターナーは本来ディディモスの著作であったと分析する。Turner, H. (1940), 'A Psalm Prologue Contained in Ms. Bodl. Barocianus 15', *The Journal of Theological Studies* 41, 286-87.

(55) *Analecta sacra* 2: 427-28.

- fol. 14v–15v : キロスのテオドレトス、Περὶ τῆς ἐκθέσεως τῶν ψαλμῶν.⁽⁵⁶⁾
 fols. 15v–17v : キロスのテオドレトス、τίνα εἰσὶ τὰ μνημονευόμενα βιβλία, οὐχ εὗρισκόμενα δέ.⁽⁵⁷⁾
 fols. 17r–19r : キロスのテオドレトス、τίνες ἡρμήνευσαν τὸ ψαλτήριον καὶ πόσοι καὶ πότε;⁽⁵⁸⁾
 fol. 19r–19v : キロスのテオドレトス、ἐρμηνεία τοῦ διαψάλματος.⁽⁵⁹⁾
 fol. 20r–21v : Τί ἐστὶ ψαλτήριον καὶ τί ἐστὶ δεκάχορδον ψαλτήριον.⁽⁶⁰⁾
 fols. 22r–28r : コスマス・インディコプレウステス『詩篇序文』⁽⁶¹⁾
 fols. 28r–30r : ダマスコスのヨアンニス、λόγος περὶ θεολογίας.⁽⁶²⁾
 fols. 30r–33v : ἑτερα ὑπόθεσις περὶ πίστεως.⁽⁶³⁾

fol. 9v 以降の『詩篇註解』のように、実際にはテオドレトスの著作でない文章に対しても、バロッチ 15 番ではテオドレトスによると明記する。バロッチ 15 番の注文主は何らかの理由でテオドレトスの神学に傾倒していたものと考えられる。

おわりに

以上の観察結果から云えるのは、まずホートン 3 番は、個人的な典礼のために使用されたということである。詩篇本文の一つのカティスマが終わるごとに祈禱文が挿入され、かつ各カティスマが一日の 24 課のうち 20 課に対応する特異な本文のスタイルからは、12 世紀のコンスタンティノポリスにおいて、総主教座のものと異なる独自の典礼が発展していた様子が読み取れる。パレンティはこうした典礼のスタイルが修道士だけでなく俗人にも受け入れられていたことを理由に、当写本の注文主の社会的身分を同定する必要性を見出していない⁽⁶⁴⁾。パルプロフはテキストのうちに食堂での典礼に係るものが見出だせないことから、ホートン 3 番のパトロンは共住修道院ではなく、^{スキーティ}庵のような場所に起居していたと指摘している⁽⁶⁵⁾。筆者としては、当時の帝都にそのような隠修用の庵があったかやや疑わしく思えるので、巻頭挿絵にプロスキニシスの姿で表された注文主は、テキストの内容からして聖母マリア崇敬を重視する共同体に属していたと判断するに留める。

対して、バロッチ 15 番もサイズからしてやはり個人的な用途に供していたと考えられるものの、ホートン 3 番のようなかたちで日々の典礼に用いられたのではないようである。冒頭に収録された詩篇註解の約半数がキロスのテオドレトスによることに鑑みると、テオドレトスの神学に沿って詩篇の理解を深めようとしていた形跡が窺える。また、ホートン 3 番のように讃歌や祈禱文を伴う詩篇写本が擡頭しつつある時代にあって、註解を多く収録する従来通りの詩篇写本に未だ需要があったことも知れる。

同じ年代に作られた同じタイプの詩篇写本ではありながら、ホートン 3 番とバロッチ 15 番からは、12 世紀ビザンティンの人々が詩篇の使用にそれぞれ異なる用途や好みを見出し、写本制作者側もそれに応えようとしていた様子が見えてくるのである。

図表出典

図 1, 3–8 : 筆者撮影。

図 2 : 筆者作成。

表 1 : Anderson, Parenti (2016), 340, Table 23 をもとに筆者が作成。

⁽⁵⁶⁾ CPG 6202a, PG 84: 25A.

⁽⁵⁷⁾ PG 84: 32.

⁽⁵⁸⁾ PG 84: 28C–29B.

⁽⁵⁹⁾ PG 84: 28.

⁽⁶⁰⁾ 著者不明。

⁽⁶¹⁾ CPG 4542. 1.

⁽⁶²⁾ CPG 8087.5, PG 95: 228D–229B.

⁽⁶³⁾ 著者不明。

⁽⁶⁴⁾ Anderson, Parenti (2016), 351–52.

⁽⁶⁵⁾ Parpulov (2014), 111.